

---

---

音 楽

---

---

---

---

思いを音に映し，高め合う授業づくり

---

---

## 1 研究の流れ

## (1) 本校音楽科のめざす子どもの姿

本校音楽科では，音楽のよさや特徴などを全身で味わい，表現する「感じて表現できる子」の育成をめざしている。そこで，本校独自の音楽活動（「歌・ことばで表す活動」「音素材で表す活動」「からだで表す活動」）を設定し，音楽と主体的にかかわり，身体を通して表現することを楽しむ姿を大切にしてきた。具体的には，「自分の思いや願いを言語化したり，記譜したりして伝えようとする姿」，「高音域を響かせて歌おうと，体の使い方を工夫しながら表現方法を獲得しようとする姿」，「リズムを体全体で感じて自然に手拍子をしたり，ステップを踏んだりする姿」などがあげられる。

このような姿は，「やってみたいな」，「もっとこうしたい」というような「思い」をもち，「音」として表現することで生まれる。ここでいう「音」とは，声や楽器の音だけでなく，言葉や文字など，子どもたちが音楽活動において表出したもの全てを意味している。そして，その「音」への感受から，また新たな「思い」が生まれてくると考える。そこで，音楽活動の中で生まれるこの「思い」と「音」を視点とし，「学ぶこと」と「教えること」について考えていくこととした。

## (2) 「思い」と「音」

まず，本校独自の音楽活動において，「思い」と「音」とはどのようなものであり，どのようにとけあい，とけあった姿とはどのようなものであるかについて授業を通して具体を見出そうとした。このことで，「とけあう姿」に至るまでの過程において，子どもたちにどのような「学ぶこと」があるのかを明らかにしようとしたのである。子どもたちは，仲間や楽器，題材などとかかわりながら生み出された音楽的イメージをもとに表現していく。そして，この音楽的イメージが形成されるにつれ，表現意図も明確になっていくことから，音楽的イメージは「思い」の中核であり，「音」へとつなぐ重要な役割を果たしていると捉えた。

次に，音楽的イメージを深め，促す授業のあり方として，アサンブルやグループ活動といった仲間と共に活動する場を設定し，教師の「教えること」をとらえ直そうとした。これらの活動は，子どもたちが他者とかわりながら自他を評価，確認することができることから，音楽的イメージを深める上で有効である。音楽的イメージをもとに，互いの「思い」と「音」とを合わせ，納得のいく表現を実現させるためには，どのような要素が必要となるか，「ひととのかかわり」に焦点をあて考えた。そこでは，「自分の役割を果たす」，「互いの役割を知る」，「全体の表現を確認する」，「全体の表現を追求する」という四つの要素

が必要になることが明らかとなった。

そして、「ひととのかかわり」から生まれる「思い」に焦点をあて、新たな教えることを見出し、「学ぶこと」を見つめ直そうとした。つまり、「思い」にはどのようなものがあるか内実を明らかにすることで、どのように合わせていくとよいのかを考えたのである。これを通し、「思い」は、「音楽的イメージ」や「音楽文化や表現へのあこがれ」、「表現意図」、「表現方法」など多様であることが明らかとなった。また、これらの「思い」は、仲間と合わせ、表現することを繰り返す中で更新されていく。そのため、意欲的・主体的に合わせたり、より調和的に合わせたりすることが重要となるのである。

以上述べてきたように、「思い」と「音」に視点をあて研究していく中で、次のような事柄が大切になるということが見えてきた。低学年では、「思い」を明確にもつことである。中学年では、「思い」を仲間と合わせて表現していくことである。高学年では、仲間とかかわり合いながら「思い」を更新し、自分たちの表現を追求していくことである。これらのことは、子どもたちが主体的に展開していくことにあわせ、教師の働きかけが重要となってくる。

そこで、本年度はこれまでの「思い」と「音」を合わせて表現していくことを大切にしながら、より主体的に自分たちの「思い」に合った「音」を追求するという「学び」に焦点をあてることとした。

## 2 思いを音に映す音楽活動

子どもたちが音楽活動においてもつ「思い」には、様々なものがある。その「思い」は、表現を通して更新されるものであるが、一方で、漫然と表現を積み重ねていくだけでは更新には至らない。自分たちの表現は「納得のいくものであったか」また「そのように感じた理由は何か」について仲間と話し合うことによって、新たな「思い」が生まれてくる。この新たな「思い」をもって再び表現し、自分たちの表現を振り返るという活動を繰り返すことで、納得のいくものへと近づいていくと考える。つまり、「思い」を「音」に映し、納得のいく表現を完成させるには、「思い」を更新させながら自分たちの表現を追求していくことが重要となるのである。

「思い」を更新させるためには、「表現」、「鑑賞」、「相談」の三つの活動が必要になると考える。以下に、これら三つの活動の果たす役割について述べていく。

### (1) 表現活動

表現活動とは、仲間と合わせた「思い」を、「音」として表出する場である。この「音」をもとに、「今のはよかった」、「思ったようにいかないな」など、自発的な振り返りが行われる。このことから、表現活動には、「思い」の更新のきっかけをつくる機能があるといえる。また、子どもたちは、表現を行いながらも「今、声がだしにくかったな」、「今回はタイミングよく入ることができた」というように、リアルタイムで自分の表現を振り返っている。こういった気づきは、「思い」に即したものもあれば、全く想定していなかったものもある。そのため、新たな課題に気づかせる機能があるともいえる。

## ( 2 ) 鑑賞活動

鑑賞活動とは、他グループより表現について意見をもらったり、他グループの表現について意見したりするといった、表現と鑑賞とが一体となった場である。他グループから感想や気づいたことを聞くことで、自分たちの「思い」が他者に伝わっているかどうかを確認することができる。また、他グループの表現を鑑賞することで、同じ曲を歌う場合でも、「明るい声で楽しく歌いたいな」、「やさしく、ゆったりと歌いたいな」というように、グループによって合わせた「思い」が異なることに気づくことができる。さらに、「思い」が同じでも、表現方法が異なる場合があることに気づくこともできる。よって、交流を通して気づいた「違い」をもとに、再度、自分たちの「思い」や「音」を吟味することから、鑑賞活動は「思い」を更新するための視点を増やす機能があるといえる。

## ( 3 ) 相談活動

相談活動とは、仲間と「思い」を合わせ、「思い」を更新していく場である。表 1 に示すように、相談活動には、授業の最初に行うものと、表現を行った後に行うものとの二つがある。前者には、「思い」を「音」に映すための計画をたて、活動への見通しをもたせる機能がある。一方、後者には、「思い」と映し出された「音」とを重ね合わせて自分たちの表現を振り返ること、つまり「思い」と「音」とを検討させる機能がある。さらに、この「思い」と「音」の検討は、次の表現に向けてのめあての設定や、表現方法の工夫につながることから、「思い」を更新させる機能があると捉えるのである。この相談活動は、状況の変化に柔軟に対応しながら行っていく必要があるため、教師のかかわりが重要となってくる。

表 1 相談内容の具体とその役割

	納得のいく表現を追求するための相談内容の具体	役 割
授業の最初	<p>めあての設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちにとってまず何をめざすか「思い」を合わせ、目標を設定する。</li> </ul> <p>(例：歌い始めの言葉をはっきり歌おう)</p> <p>方略の選択</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>めあてを達成するための表現方法を考える。</li> </ul> <p>(例：リズムをとりながら前奏を聴き、ブレスのタイミングをそろえるようにしよう)</p> <p>計画</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>担当する楽器や声部のパートや、グループの中での役割を決める。</li> <li>パート練習をしてから全体で合わせてみようというような学習形態や活動の流れを決める。</li> <li>時間配分を決める。</li> </ul>	活動への見通し
各表現の後	<p>めあての達成度を評価する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>表現をもとに、めあてや計画が達成されたか、達成の方向に向かっているか判断する。</li> </ul> <p>十分満足な表現、満足できない表現となった原因を分析する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>めあてが適切であったか検討する。</li> <li>めあてを実現させるための表現方法は適切であったか検討する。</li> </ul>	「思い」と「音」の検討
	<p>めあての修正・再設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>おおむね達成できた場合は、最終的にめざす表現へ向かうための次のステップを考える。</li> <li>達成できなかった場合は、めあてを再度吟味し、設定する。</li> </ul> <p>方略変更</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>めあてが達成できなかった場合は、表現方法を見直し、修正したり、新たな表現方法を考えたりする。</li> <li>めあてが更新された場合は、そのめあてに合った表現方法を考える。</li> </ul> <p>計画修正</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループでの活動の仕方(活動の流れ)を修正したり、新たな計画をたてたりする。</li> </ul>	「思い」の更新

#### ( 4 ) 相談活動における教師のかかわり

まず、低学年では、何について相談するのかを明確にしておく必要があり、特に次の二つのことについて相談できるよう促す必要がある。一つ目は、どのような表現をめざしたいのかという活動へのめあてをもたせることである。グループ内で自分の「思い」を交流することにより、より明確な「思い」をもつことができるからである。二つ目は、表現後、めあてについて振り返らせることである。子どもが自分の表現を振り返るとき、「楽しかった」、「うまくいったよかった」といった感情面が中心となってしまう。そこで、めあてが達成できたか問いかけることで、自分の表現とめあてを照らし合わせて考えるようにさせる。また、どうしてそのように感じたのかについても問いかけることで、その要因を表現方法と結びつけていく。このことにより、「思い」を「音」に映すための方略を一つずつ増やしていくことができると考える。

中学年においては、「思い」を合わせることが重要となる。個人の「思い」に固執しやすい傾向にあるため、グループとしての「思い」を意欲的・主体的に、さらにはより調和的に合わせたりすることができるよう働きかける必要がある。具体的には、そのグループならではの表現や表現方法などを見つけて認め、意味づけや価値づけを行うことで、自信をもたせ、グループとしてのまとまりを強くすることがあげられる。その他にも、個人の活動を楽しんでいる子どもに、自分の役割について問い直すことで、グループの一員であることや、主旋律なのか、伴奏なのかといった、自分のパートの役割について意識させることがあげられる。また、他グループの意見を参考にしながら自分たちの表現を振り返る場を設定することで、振り返りの視点を増やすことも大切となる。視点を増やすことで、様々な角度から自分たちの表現を振り返ることができるようになることから、相談内容も増え充実した相談活動となると考える。

高学年においては、様々な視点から主体的に自分たちの表現を振り返り、納得のいく表現を追求していくことが重要となる。そこで、次の二つのことを中心に働きかけを行うこととする。一つ目は、方略について互いに交流し合う場を設定することである。グループ内や、他グループと方略について交流すると、様々な方略を知ることができる。その方略を試してみることで自分たちに合ったものを選択することができるだけでなく、自分たちの方略が正しいかどうか確認することもできると考える。二つ目は、振り返りを積み重ねることである。自分で考え学習を進めている子どもは、振り返りにおいて、めあてやそれを達成するための方法、結果、改善したことなどについて詳しく述べることができる。よって、振り返りの発言や記述をもとに子どもの学びを把握することで、主体的な学びへつなげていくことができると考える。

これらの相談活動を繰り返すことで、自分たちの表現に高まりが感じられた時、子どもたちはこの学び方に価値を見出す。そして、意欲的・主体的に相談活動を行いながら自分たちの表現を追求していくようになると考えている。さらに、この学びの積み重ねにより、相談活動はグループ内で行われるだけでなく、個人内でも行われるようになると思う。このことによって、より主体的に音楽にかかわることができるだけでなく、自らの力によって表現を追求し、納得のいく表現を実現させられると考えるのである。

### 3 思いを高め合う音楽活動

表現を高めていくためには、自分たちの「音」を検討することが必要となる。この検討を行うには、「音」を吟味できる場の保障と、他者とのかかわりが重要であると考え。そこで、これらを踏まえ、1 単位時間の授業におけるグループ活動と音楽活動におけるかかわりについて、以下に述べる。

#### (1) 「表現活動 - 相談活動 - 鑑賞活動」のサイクルを取り入れた活動

この活動は、図 1 に示すように、各班が「表現 - 相談 - 鑑賞」の活動サイクルを行うものである。全グループが一斉に音を出す場とはならないため、グループ内の「音」に浸ることができる。

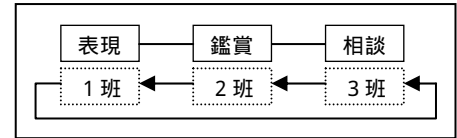


図 1 活動の流れ

さらに、この活動サイクルは何度も繰り返すことができるため、

歌ったり演奏したりしながら早く曲に慣れたい場合に有効となる。ここでの鑑賞活動は、表現を参考にするだけでなく、演奏に合わせてリズムをとる、階名で歌う、リコーダーの運指を確認するという点において、間接的に他グループともかかわっている。

#### (2) 「表現活動」と「鑑賞活動」を行うグループが交流を行う活動

この活動は、図 1 に示す流れの中で、「表現」と「鑑賞」の活動を行うグループが交流を行うものである。他者と直接かかわる場が生まれるため、図 2 に示すように、二つのグループ間には、「ズレ」が生じることが多い。具体的には、表現者の表現意図と鑑賞者の感

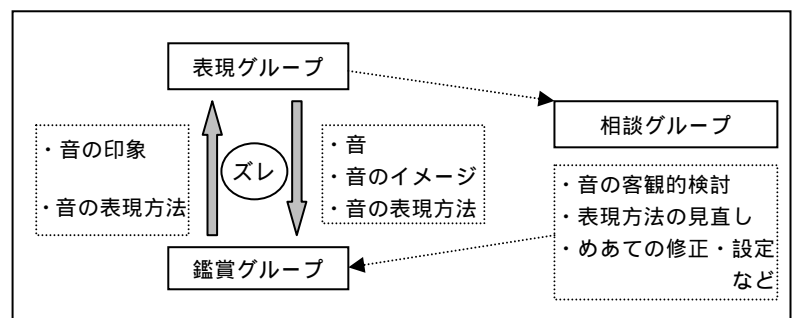


図 2 グループ間の交流を取り入れた活動の流れ

受、表現方法の選択などがあげられる。この「ズレ」を視点に意見を交流し、「ズレ」の要因を明らかにすることで、互いの「思い」が明確になるとともに「音」を検討する視点が増える。よって、表現をさらに追求し、納得のいくものにしていきたい場合に有効となる。ここでの相談活動は、鑑賞・表現活動のかかわりにおける気づきをもとに相談を行うという点で、間接的に他グループともかかわっている。

#### (3) 音楽活動におけるかかわり

子どもたちが納得のいく表現を追求していくためには、「音」を通して「思い」を更新していくことが大切である。しかし、「思い」を個人で更新し続けることは、個人としての視点が限られてしまうため難しく、他者とのかかわりが必要となる。そして、他者とかかわることで、他者の視点を自分の中にもつことができるようになるのである。このことによって、多様な視点を徐々に自分のものとして、表現の振り返りを行うことができるようになる。これらのことから、表現と鑑賞の活動での他者とのかかわりや、相談活動における「音」の検討を通して、「思い」を音に映し表現していくことができると考えるのである。

( 白石和美・井筒かおり )

